

# Chapter 第1章

## 2つの基本的な疑問

1

英語はヨコに勉強すべきか？

タテに勉強すべきか？

2

「英会話」とは何か？

この章では、英語という言葉とその勉強法について大きくとらえ直し、その二つについて私が考えるもっとも根本的な疑問をみなさんに問いかけたいと思います。

最初は、「言葉（そして言葉を勉強すること）とは、ヨコ向きのものなのか、それともタテ向きなのか」ということです。

その次に、言葉とその学習がヨコかタテかという考え方を念頭におきながら、「英会話」にまつわる疑問についてお話ししようと思います。

「ヨコ対タテ」という言葉の性質は、「英会話とは何か」という大きな疑問とともに本書を流れる二つの大きなテーマです。実際に項目を設けて解説したところもありますし、特にそれとはことわらないで述べているところもあります。

それでは始めましょう。



## 1 英語はヨコに勉強すべきか？ タテに勉強すべきか？

### 1-1 英語のヨコとタテとは？

おそらく、みなさんの中で今までにこんなことを考えた人はいないだろうと思います。しかし私は確信しています。気づいていないかもしれませんが、これはみなさんが英語を勉強するさい、心の片すみから一度も離れたことのない疑問なのです。

英語がヨコだとかタテだなんて、おかしなことをいうな、などと思ったではありませんか？しかし、英語を含め、外国語を勉強するのが難しい理由は、言葉というものがそれ自体、ヨコであると同時にタテでもあるからなのです。

私たちが言葉を話し、聞き、読み、書くとき、つねにこの2つの方向、すなわち言葉のヨコ軸・タテ軸というべきものを同時に扱わなければならないのです。

では実際、言葉のヨコ・タテ軸とは何を指すのでしょうか？

少し例をあげましょう。たとえば、「I like」の後には'ing'形が続くことが多い」というのは、言葉をヨコ方向に述べた例です。もう一つ例をあげると、「主語が'he'と'she'の場合、単純現在時制の動詞は'he walks'のように's'をつける」というのも同じくヨコ方向に述べた例です。

これらがどうして、言葉についてヨコ方向に述べているとみなすことができるかという点、言葉の構造に関わるルールを左右の語句との関係から、すなわちヨコ軸にそって述べているか

らです。私たちが何かを書くときは左から右へヨコ方向に書きますね。ちょうどそれと同じような感覚だと思ってください。

それでは、言葉をタテ方向に考えるとは、どのようなことなのでしょう？これはそう難しいことではなく、次のような場合、言葉についてタテ方向に述べていることになるのです。

- 'I like swimming.' といえるなら、同じように 'I like skating/sleeping/singing.' などということができる。
- 同じ文で、'like' の代わりに 'love/enjoy/dislike/hate' も使うことができる。

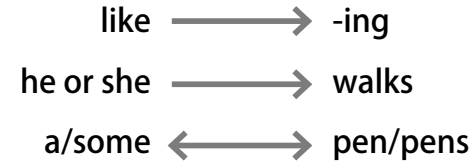
さらに今度は見方を変えて説明してみましょう。言葉をヨコ方向にとらえて考えるとき浮かぶ疑問は次のようなものです。

- この単語の前に来るのは何か？後に来るのは何か？
- この単語はその前後に来る語句にどんな影響を与えるのか？

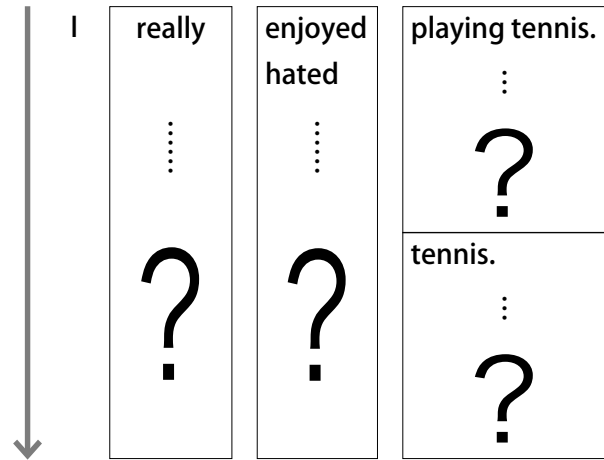
たとえば、「私は店で 'pen' を買いました」と英語でいう場合、'pen' という単語はその前に来る語句に影響を与えますね。'pen' は単数形で、また、どれと決まったものを買うわけではありませんから、'I bought a pen in a shop.' という英文になるはずですが、つまり、'pen' の影響により、その前に 'a' が来ることになるのです。

また、何本かの 'pen' を買う場合は、'pen' に 's' をつけることにより、その前に 'some' が来ることになります。そうすると、'I bought some pens.' となるでしょう。

英語をヨコに考える



英語をタテに考える



タテの箱の中には、他にどんな語句を入れることができるだろうか？  
 そうすることにより何通りの違った表現が可能になるか？

図1 英語をヨコとタテに考える

このように、「a/some'は'pen'とヨコ方向のつながりがある」ということができるのです。

一方、英語をタテ方向に見たり考えたりすると浮かぶのは次のような疑問です。

- この単語の代わりに他のどんな単語が使えるだろうか？
- 何通りくらいの違ったいい方ができるだろうか？

たとえば、みなさんが青いシャツを買った場合、おそらく'I bought a blue shirt.'というでしょう。しかし'blue'の箇所を入れかえれば、他にいろいろな色のシャツを買うことができますはず。それをタテ方向に並べてみましょう。

↓	I bought a	blue	shirt.
		light blue	
		pale blue	
		dark blue	
		navy blue	
		greenish-blue	
↓	私は	青い	シャツを買った。
		ライトブルーの	
		淡青の	
		濃青の	
		ネービーブルーの	
↓		緑がかった青色の	

ここで注意してほしいのですが、英語のヨコとタテを単に文法とボキャブラリーの違いだけの問題とは考えないでください。likeの例では、「動詞の'like'は'ing形'が後に続くことが多い」ことを次のようにタテ方向に考えることもできるからです。

↓	like	swimming
		sleeping
		walking
↓	水泳	が好きだ
	寝るの	
↓	散歩	

言葉を教えたり学んだりする場合、タテ・ヨコ2つの軸が両方とも大変重要なのはいうまでもありません。この2つが適正な配分でバランスがとれていることが必要なのも同様です。

私が見るところ、またこれは私自身がそうやってきたことでもあるのですが、日本の英語教育は、教師がヨコ方向の規則を説明し、それを生徒が学ぶというパターンが主流です。つまりヨコ方向に英語を教え学んでいるのです。

問題演習もヨコ方向に問題を解かせるものが圧倒的です。たとえば、大学入試の並べかえ問題は、言葉をヨコ方向に扱うものです。受験者は語句を英文法のヨコ方向の規則にしたがって並べかえなければなりません。(次頁、図2を参照)

穴埋め問題はどうでしょう？このような練習はヨコ方向に英語を扱うものでしょうか、それともタテ方向でしょうか？この類の問題は受験勉強の代名詞のようにいわれますが、意外なこ

問い：次の日本語に合うように英文の（ ）内を並べかえなさい。

「決定的な出来事がすぐに起きるのは明らかだった」

It was (events, decisive, clear, were, that) at hand.

#### ヨコ方向の知識

- ・ It is clear that ~ (～は明らかである) という構文
- ・ decisive events (決定的な出来事) というコロケーション
- ・ events were: 主語が複数の場合の be 動詞の過去形
- ・ be at hand (差し迫っている) というイディオム表現

決定的な 出来事が すぐに起きるのは 明らか だった。

① ② ③ ④ ⑤  
It was (events, decisive, clear, were, that) at hand.  
⑤ ② ① ④ ③ ④ ③

日本語の①②③④⑤=英語の⑤④①②③

解答= It was clear that decisive events were at hand.

日本語に合うように英文の（ ）内を正しく並べかえるには、文法や構文などをもとにした正しい英語の語順のルール、つまりヨコ方向の文法知識を知っていなければならない。

図2 「並べかえ問題」と英語のヨコ軸

とに、英語の穴埋め問題はたいていヨコ方向の性格とタテ方向の性格を両方ともそなえています。

たとえば、これは一例として私が作成した問題です。

Don't ( ) your personal problems affect your work.

(1) allow (2) let (3) make (4) achieve

この場合、正解を出そうとしたら、解答者は以下のように英語のタテ・ヨコ両軸を考慮することになります。

まず、選択肢全体を眺めると、(4)だけが「～させる」という意味ではないと直感されます。ですから、ここで解答者は即座に(4)の可能性を除外すると仮定しましょう。

次に解答者はタテ方向の質問を自分に問うことになります。「残りの3つのうち、意味と文脈からどれが一番この文にぴったりだろうか」。おそらくこの文は、「自分の個人的な問題に仕事に影響を与えさせてはいけない」という文脈になると推測されます。そうすると、解答者は選択肢を順に見て、(1)と(2)が可能性が高いと考えるでしょう。

次に、解答者がこの英文をヨコ方向に眺めていくと、'allow ~ to do'か'let ~ do'か(つまり「to不定詞か原形不定詞か」という英語のヨコ方向の規則を思い出すはず。そうすると、答えは(2)ということになりそうです。

しかし、その時になって解答者は、ヨコ方向に考えれば、'let ~ do'だけでなく'make ~ do'ともいえるのだから、(3)も( )内に入りそうだと気づくでしょう。

ここで解答者は再びタテ方向の疑問を抱くのです。「この文は空欄に、‘make’と‘let’のどちらを入れれば、意味をなすのか」。make だと、「強制的に～させる」という意味になってしまいますから、答えはやはり‘let’です。

上述のとおり、穴埋め問題はふつうはヨコ・タテの両面をもっています。しかし、次のような場合は必ずしもそうではありません。

John enjoyed (      ) tennis.  
(1) play (2) playing (3) played (4) to play

すぐおわかりのように、この問題は、解答者があるヨコ方向の規則、すなわち、「enjoy’の後には動詞の‘ing形’が続く」ことを知っているかどうかを試すものです。

## 1-2 「メタ言語」を避けよう

何年か前に、私はある有名な予備校で日本人の講師とペアで授業を行っていました。その時私は、その授業で膨大な量のヨコ方向の授業が行われていることにいつも驚いていました。講師はいつも次のような教え方をしていました。

### 【知覚動詞の語法】

知覚動詞＋目的語＋動詞原形

口頭で教えるだけで、例さえあげないことも少なくありませ

んでした。私はいつも次のように教えるほうが合理的なのにと感じていました。

何かを見たり、聞いたり、感じたりするときは同じような文型になります。ですから、‘I saw him come.’といえるのだったら、同じように次のような表現が可能です。

I heard him come.  
(私は彼が来るのが(彼の足音が)聞こえた)  
↓  
I felt the insect creep up my nose.  
(私はその虫が鼻をはい上がってくるのを感じた)

この例から、英語についてヨコ方向に述べるかタテ方向に述べるかの違いがいかに重要であるのかがわかります。ヨコ方向に述べた場合、それは英語そのものの姿を伝えるのではなく、英語に「関して」いろいろな記号を用いて説明することになってしまうのです。

日本の英語教育を受けたことのある人なら誰でもこういった記号をたくさん知っているでしょう。上の例からわかるように、ヨコ方向に述べることにより、英語が文法用語で記号化されてしまうのです。

他にいくつか、みなさんもよくご存じの「記号」とそれを用いた文法の説明を下にあげます。( )内は私のコメントです。

- SVO<sub>1</sub>O<sub>2</sub> (文法用語が記号で表されている例)
- 知覚動詞＋原形 /-ing (順に：文法用語、記号、文法用語、記

号、断片的な英語)

- like 等 + -ing (順に：英語、日本語、記号、断片的な英語)
- I give 物 to 人 (日本語と英語の混合だが、両方の言葉を知っていると変な感じがする)
- 現在完了形 = have + 過去分詞 (左側の文法用語が、右側で断片的な英語と記号ともう一つの文法用語で説明されている)

日本の学校や教科書などにおける英語教育の実に大きな部分がこのような形式による授業と学習で成り立っているのです。はっきりいって、効果的なやり方とはとても思われません。

つまり、このように英語をヨコ方向に教える方法は、本当の言葉ではなく、「メタ言語」を扱っているのにすぎないのです。「メタ言語」とは「言葉を説明するための言葉」です。上の例では、メタ言語はだいたい何種類かの記号や文法用語、そして日本語からなっています。

ひとたび英語学習が上で説明したようなヨコ方向の学び方に陥ると、学習の真の目的である実用英語の習得とは大きくかけ離れてしまうのです。

ヨコ方向の英語とタテ方向の英語を比較すると、**タテ方向の英語には記号やメタ言語が一つも使われていません**。難しい記号を本物の英語に変換するプロセスをへずとも、学習者がすぐに使えるデータばかりであることは明らかです。タテ方向の英語は、それ自体が本物の英語だからです。ここでいう「データ」とは、英語がさまざまな場面で実際に用いられている姿だと考えてください。

また、英語のデータはタテ方向に示されれば、即座に自分

でそれを使うことができるのです。たとえば、先ほどのように「enjoy」の後には動詞の「ing 形」が続く」とヨコ方向に説明されるよりも、次のようなタテ方向のデータを見れば、すぐに「I enjoy playing tennis.」(私はテニスをするのが楽しい) ということができます。

↓	John	enjoys	playing tennis.
↓	He	enjoys	playing football, too.

そうすると、次のようにいろんなオリジナルの表現をすることができるようになるのです。

↓	I	enjoy	swimming. (水泳をするのが楽しい)
↓	I	hate	playing football. (サッカーをするのは嫌いだ)

ヨコ方向の記号ばかり使っているのはこのようにはいきません。なぜなら、記号は本物の英語に「翻訳」されねばならず、そのプロセスをへて初めて、実際に英語を使う準備が整うからです。

ヨコ方向に英語を勉強している人は、頭の中で次のような「翻訳」、つまり「変換プロセス」を行わなければなりません。

「ええと、『知覚動詞+目的語+ -ing』... 『知覚動詞』の例は何だったっけ？ あっ、そうだ。‘see’だ。だから‘I see walking’だ。いや待てよ。目的語が必要だ。わかった。‘I see him walking.’だ。よし！」

I saw him come.  
I heard him come.  
I felt the insect creep up my nose.

英語を記号化してしまうヨコ方向のメタ言語を捨てて、タテ方向に英語を学べば、使える英語力がすぐに手に入る。

図3 メタ言語を捨ててタテに学ぼう

タテ方向に学ぶことにより、英語の勉強はもっとずっと楽になるのです。それにより本物のコミュニケーションで使える英語をすぐに手に入れることができるようになるからです。

こんな場面を想像してください。あなたはオーストラリアの高校へ日本語教育の実態を調べるために出張しました。そこであなたが見たのは、次のようなことを教師がいたり、黒板や教科書や参考書に書いてあったりする光景でした。しかも、あなたかもそれが授業や学習の目標であるかのように……

A は thing を B に + verb of giving/passing.  
(eg. 渡す, etc.)

person + と / に + 会う

place + を + verb of movement

このような場合、あなたはオーストラリアの日本語教育はかなりおかしいと思うのではないのでしょうか。いや、そう思ってください！しかし、これが日本で毎日、何万という教室で行われていることなのです！さらに無数の社会人も自宅の机に向かって、このようなやり方で英語を勉強しているのです。

上のオーストラリアの例は、たとえば次のように教えるほうがはるかにいいと思いませんか？

彼は	私に	ペンを	渡した
私は	太郎に	プレゼントを	あげた
駅員は	お客さんに	落とし物を	返した



このように教えることにより、学習者は、新しい文をたくさん作ることができるはずです。たとえば、

駅員は太郎にプレゼントを渡した。

のように応用を加えて組み合わせることができるでしょう。

このように外国語を勉強するほうが「コミュニケーションのために言葉を使うこと」にいつそう近づくように思えます。まさにこれが、外国語を教える・勉強する目的でもあるのです。

### 1-3 日本の英語教育の問題点

もちろん、どんな場合にも記号などを用いたヨコ方向の英文法学習がいけないというわけではありません。

問題なのは、これが日本の英語教育における教え方の主流であるとともに主な目標にもなっていることです。(もっとも、'I give 物 to 人'の類はまず間違いなく学習者を混乱させ、英語力向上の妨げになるでしょうが)

しかしなぜ、ヨコ方向の言葉を教えるのにこれほど力を入れなければならないのでしょうか？

まず、英語があまりうまく話せず、発音に自信のない教師にとって、もっとも簡単で「安全な」教え方は、言葉とはヨコ方向の規則の集まりであると生徒にたたき込むことです。このようにすれば、その教師は英語をあまり話さなくてもすむことになります。ただ、メタ言語で話せばいいのです。

私自身も、もし日本語のネイティブスピーカーの手助けなく

日本語を教えなければならない状況になったら、やはりヨコ方向のメタ言語を教えようという誘惑にかられることは間違いありません。

日本人の英語教師が英語がうまく話せないとか、会話が聞き取れない、発音もカタカナ式だ、などの批判があることは私も知っています。おそらく2、30年前にはこのような批判も当たっていたかもしれません。

しかし、今では実に多くの英語教師(おそらく大多数)が英語を不自由なく話し、さらに多くの場合、素晴らしい水準にあると私は思います。したがって、英語教師側の実力不足を隠すのに便利なメタ言語を、しかもヨコ方向に教えるなどという悪習を断つことは十分可能なはずです。

しかしながら、上で述べたような教え方が日本の伝統であり、現在の教師自身はその古い世代の教師に教わった経験があるため、このような教え方から抜け出すことができないのです。

一般的に教師というものは、学習者が知らねばならないことを教えるのではなく、自分の知っていることを伝える傾向が大きいのですが、日本の英語教育事情はその一つの側面にすぎません。(大学でも多くの教育の場がこのような病理にむしばまれているといえます)

また、英語教師はその多くがメタ言語というきわめて込み入った体系をマスターした経験があり、そのことに誇らしげな喜びのようなものを感じているのではないかと思います。いいかえれば、それを生徒に誇示するために、メタ言語を教室でも使いたがるのではないでしょう。

特に、大人数の授業の場合、これは教える側にとってかなり

の負担の軽減になります。教師は、生徒たちに積極的に英語を使うよう励ますより、その場に立ったまま講義をするほうがよほど楽です。教師自身だけでなく生徒たちにとってもです。

このような教え方は、英語だけでなく、日本の教育における全般的な教授法に適合するものです。教師は教えるべき教材を知っており、講義形式でそれを生徒の頭の中へと運び込めばよいのです。

本書を手にとったみなさんは、このような英語教育界の矛盾にある程度気づいているはずです。

そのようなみなさんが取るべき手段は、ヨコ対タテという、言葉のとても基本的なコンセプトを理解し、英語に取り組むさいも、ヨコ方向の勉強よりもタテ方向の勉強を増やす（そして、特にメタ言語というヨコ方向の言葉を避ける）ことです。

そして、勉強中はずねに次のようなことを意識してください。

- 今自分のしている作業は、ヨコ方向の勉強なのかタテ方向の勉強なのか。
- この作業は英語習得につながるものなのか。
- もしそうだとしたら、どんなことができるようになるのか。

## 2 「英会話」とは何か？

「英文法は知っているが、英会話ができない」。これは日本人がよく口にする言葉ですが、これも上で述べた「ヨコ対タテ」の関係から考えると、その仕組みがよくわかるのです。この理由の一つは、「学校で文法は習ったが、『英会話』は勉強していない」というものです。

しかしこれは、次のようにいっているのも同じことです。

「私たちは、ヨコ方向のメタ言語は習ったが、タテ方向の言語は習わなかった。だから、私は『知覚動詞』と『関係代名詞』と『現在進行形』は知っているし、本当にたくさんの練習問題を学校でこなした。これらの項目について先生は何回も説明してくれた。しかし、私は'I can see the man who is walking down the street.'といえないのだ」

先ほどのオーストラリアの例を振り返ってみると、これはあたかもオーストラリアの学生が7年も8年もかけて、

A は thing を B に +verb of giving/passing (eg. 渡す, etc.).

と学ぶのと同じことです。しかしこのように学んでも、「純子は犬に食べ物をやった」のような簡単な文さえ出でこないでしょう。

もし、その学生が、オーストラリアでは日本語を学んだが、学校で「日会話」を覚えてくれなかったから自分は日本語が話せないのだといったら、みなさんはびっくりするでしょう。

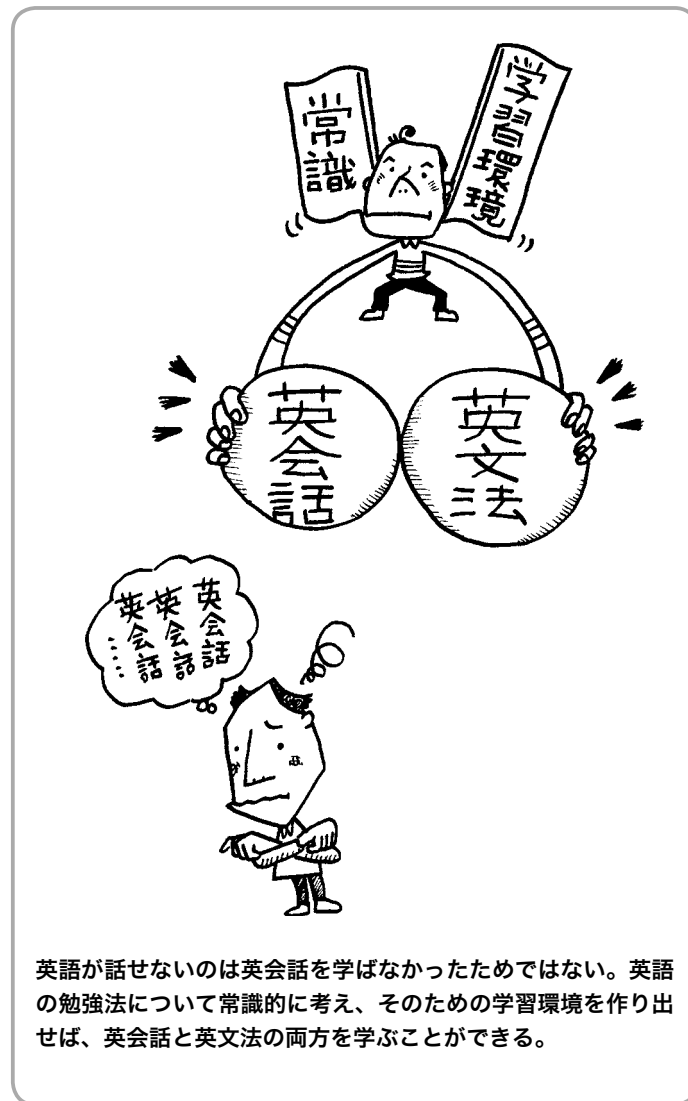
私自身もこう思うでしょう。「彼の先生は教え方が下手だった。彼は、役に立つ日本語をどう学べばいいか効果的なやり方を見つけていない。今のペースでは、本当に勉強したといえるくらい日本語を使えるレベルにはとても達することができないだろう」と。

このように考えると、日本の学校で行われている英語教育のさまざまな謎が違った角度から明らかになります。

すなわち、英語を話せないのは英会話を習っていないかどうかが問題ではありません。本当の問題は、英語という言葉を実用になうように学んでいないため、おそらく決して満足のいくレベルに到達することができないだろうということなのです。

「日本人は学校で英語を学ぶが、英会話は学ばない」という台詞は、日本の英語教育に携わる人たちが何年もの間、隠れ蓑にしてきた責任逃れの口実にすぎないのです。そういい続けることにより、毎年何万もの日本人が高校や大学を卒業しながら英語で何の用も足すことができない（話し理解することはもちろん、読み・書きも含めて）という英語教育の現状に負う責任を逃れることができるわけです。

またそれは、ある程度のレベルにも到達できない学習者たちの言い訳にもなります。なぜなら、自分たちが英語のできない理由をこういえるからです。「私は学校で英会話を習わなかったから、ごく簡単な英語の会話もできないのは自分の責任ではありません」。



英語が話せないのは英会話を学ばなかったためではない。英語の勉強法について常識的に考え、そのための学習環境を作り出せば、英会話と英文法の両方を学ぶことができる。

図4 英会話と英文法

実際、彼らは自分の失敗を、自らの力の及ばない要因のせいにするだけで釈明することができるのです。

こういった「都合のよい虚構」が日本の社会全体に流布しています。ですから、「英会話」をめぐる日本の事情は、このような虚構をもとにして教育界が作り出した陰謀であるとさえいうことができるでしょう。

それではこういった状況の中、実際問題として、みなさんが少しでも英語力をつけたいと思うなら、どうすればよいのでしょうか？

その答えは、英語の勉強の仕方について常識的に考え、そのための学習環境を自ら作り出すことです。

現在あるいは過去に教室でどのように英語を教わって来ようが、それとは別にどうすれば理にかなった勉強になるかを考え、それ相応の勉強をすることができる環境を自分で作り出すしかありません。そうすれば、自分の満足できるレベルで英語を話し、理解し、書き、読むことができるようになるでしょう。

私は、英会話をマスターしようなどという考えは捨てることをお勧めします。私が勧めるのは、本書で提唱されているようなアドバイスに従うことです。そうすれば、あなたは英語(英文法)と英会話を同時に学ぶことができるのです。

もっとはっきりいってしまえば、そもそも「英会話」と呼ばれるものなど存在しないのです。あるのはただ「英語」のみ。だから、「ふつうに」学ぶのが一番なのです！